〈神話と現在〉……歴史との交差

現代のプロメテウス

伊東剛史

昨年は、「フランケンシュタイン生誕二〇〇周年」にあたり、世界各地で関連イベントが催された。フランケンシュタインの知名度の高さがうかがえる。ただ、メアリー・シェリーの原作ではなく、翻案作品（二次的創作物）を通してフランケンシュタインを知った人も多いのではないだろうか。わたし自身も、小さい頃に見たテレビアニメ『怪物くん』に登場する人造人間フランケンから、フランケンシュタインのイメージを得た。フランケンシュタインは、実は怪物を生み出した科学者のことで、怪物には名前がなかったと知るのは、もう少し後のことだった。

メアリー・シェリーによる原作のタイトルは、『フランケンシュタイン――現代のプロメテウス』である。プロメテウスは、ギリシア神話において天界の火を盗み人間に与えた神である。そのおかげで人間は自然に抗し文明を興したが、同時に武器を作り戦争を起こした。ゼウスの逆鱗に触れたプロメテウスも山頂に磔にされ、鷲に肝臓を啄まれる昼と肉体が再生する夜とを永劫繰り返す責苦にあった。メアリー・シェリーがフランケンシュタインをプロメテウスに準えたのは、才知溢れる科学者の生命創造の偉業と、人類存亡の危機との対比を際立たせるためであろう。そこに家族、親友を失った科学者の苦悶と、愛を得られなかった怪物の煩悶が重なり合う。

一八三一年版の序文で、シェリーはエラズマス・ダーウィンのある発見に触れている。エラズマス・ダーウィンは、『種の起源』を著したチャールズ・ダーウィンの祖父である。エラズマス自身も著名な博物学者であり、『ズーノミア』や『自然の神殿』等を遺して、孫チャールズの進化論に影響をおよぼした。シェリーによると、このエラズマスがヴェルミチェッリ vermicelli（スパゲティのような麺状のパスタ）をガラス容器に入れて放置したところ、それが動き出したというエピソードから創作のヒントを得たという。実は、エラズマスが観察したのはパスタではなく、ツリガネムシ vorticella なのだが、シェリー本人も微生物のことを言いたかったのだろう（vermicelli は「小さなミミズ」の意）。こうしたズレも含めて、『フランケンシュタイン』という作品は、当時のヨーロッパにおける科学とそれを取り巻く人々のありようを伝えてくれる。この頃、生命活動における電気現象が最先端の研究課題となり、その内容が出版物、講演会を通じ専門家の枠を超えて幅広く知られるようになった。『フランケンシュタイン』は近代科学がその存在感を増し、大きな変貌を遂げていく時代の歴史的産物だったとも言える。

翻ってみて、「現代のプロメテウス」のわたしたちにとっての現代性とは何だろうか。原子力、生命工学、人工知能といった制御困難な科学技術への過信に警鐘を鳴らすフランケンシュタインの姿が立ち現れる。怪物もまた、母性や出産をめぐるジェンダーの問題や、人と動物との境界性といった問題を提起する。かくして、物語は語り尽くされるどころか、現代（いま）を考える縁（よすが）となり、新たな作品を創造していく。二〇一一年初演の劇場版では、脚本家ニック・ディアが怪物の視点から物語を再構築し、公演期間を通してふたりの役者がフランケンシュタインと怪物を交互に演じた。人／怪物に宿るものそれぞれが、実は表裏一体ではないかと問いかけてくる。

解体された神話は、歴史の産物としての物語になる。そこから歴史を超えた意味が紡がれる時、物語は現代の神話として読み継がれていく。

いとう・たかし　総合国際学研究院准教授　イギリス近代史

文献案内

メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』小林章夫訳、光文社、二〇一〇年
小川公代、村田真一、吉村和明編『文学とアダプテーション――ヨーロッパの文化的変容』春風社、二〇一七年
Andrew Smith (ed.), *The Cambridge Companion to Frankenstein*, Cambridge: CUP, 2016